



# 美人OLたちの 魅惑オフィス

巨道空二

挿絵／御垢葉ひかる

立ち読み版

KTC  
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

序章	新人社員の日常	4
第一章	彼女のそばで	9
第二章	あの人 of 唇	58
第三章	ダブル・スタンダード	105
第四章	一人と三人	155
第五章	優柔不断の果てに	216
終章	新しい道	283

## 登場人物

Characters

### 高原孝治

(たかはらこうじ)

梱包資材等を扱う会社の新米社員。どちらかというと引っ込み思案の性格で、新人研修をきっかけに祥子と恋人となる。

### 皆川さやか

(みなかわさやか)

孝治が配属された課の課長代理。有能で頼れる上司ながら時に奔放な素振りを見せることも。自分を慕ってくる祥子を可愛がっている。

### 新藤祥子

(しんどうしょうこ)

総務勤務。孝治の隣の部署の先輩で恋人。明るい性格で、さやかに憧れを抱いている。

### 木原佳奈美

(きはらかなみ)

孝治の取引先の快活なビジネスウーマン。創業者一族のお嬢様で高飛車。

「えー、なんで？」

コピー機の脇のミスコピーの山の中に連絡を忍ばせておくのが祥子との連絡方法だ。待ち合わせ時間はプラス七して、十九時集合。いつものフロアは、喫茶店フロアのこと。他愛ない暗号なのだが、孝治としては誰かにバレるのではないかと気が気ではない。

「ぼくはやっぱりメールのほうが安全だと思っただけだな」

「うーん。でもなー。メールじゃ味気ない気もするしなー」

明るくて元気なわりに祥子はロマンチストだ。メールよりも暗号などを使った連絡のほうがドラマチックだと信じているのだ。少し考えてにっこりと微笑んでみせる。

「うん、わかった。また新しい連絡方法を考えるね」

大きな目はキラキラとして、新しい遊びを始めたネコみたいに光っていた。また何か斬新な方法を考えるつもりらしい。全然わかっていないと考えつつも、それ以上逆らえないまま、新米サラリーマンは小柄な先輩OLと夜の雑踏の中を進んでいくのだった。

「孝治くん、もういいわよ」

「はい」

シャワーからあがった祥子の肌がピンク色に染まっている。日に焼けた肌が色っぽく、心臓がドクン、と大きく打った。

服を脱ぎながら、髪を整える祥子の様子を窺うのが孝治の密かな楽しみだった。スポーツ好きの祥子の身体は小柄だけれどもよく引き締まって、意外なほどにプロポーションがいいのだ。胸だつて、カップは大きく、片手に余るほどのボリュームを誇っている。学生時代のあだ名はプチ爆弾といったそうだが、それも納得の魅力的な肢体なのである。

（祥子さんつて、小柄だけどいい身体してるよなあ）

「こらっ。まだ早いわよ。先にシャワー浴びてきて」

見とれていたら叱られてしまった。ショートの髪にドライヤーを当てながら照れくさそうにガウンの胸もとに手をやる彼女に手を振ってみせ、湯気のたちこめるシャワールームに足を踏み入れる。

ついさつきまで祥子がこので身体を洗っていたと思うとそれだけで身体の一部が元気になってしまうのは、若さというものだろう。

若者は手早く汗を流し、身体を拭くのもそこそくに室内着を羽織る。股間のモノは

すでに熱く、固くなってしまっていてラブホテルに用意された薄手のガウンは首をもたげた男のモノの存在を隠せずにいた。

隠すものでもないのだが、やはり照れくさい。そんな微妙な表情の青年にタイミン  
グよく冷たいコップが手渡された。このさりげなさは、やはり同い年の女性にはない  
気がする。

「はい、お水」

「ありがとう、祥子さん」

差し出されたコップをぐいぐいと傾け一気に飲み干してしまうのを、年上の女性は  
クスクス笑いながら見守っている。空になったコップに注いでくれる分も、あつとい  
う間に飲んでしまった。

「ふうーっ。気持ちいいなー」

「ふふっ。孝治くん、すごく美味しそうに飲むのね」

ソファアの肘掛けに頬杖をついた祥子が微笑んでいた。

「そりゃまあ、祥子さんが注いでくれたんだし」

「やあね、もう。おだててもこれ以上出ないわよーだ」

分厚いクッションのソファアに腰掛けた青年に、かすかに目元を赤く染めた祥子が

身を寄せてくる。ぴとっと押しつけられた柔らかい感触に若者の血は早くも熱くたぎっていた。

ショートカットの少女じみた女の細腕に抱え込まれた上腕がとろけそうに気持ちいい。小柄な先輩OLの腕はしなやかな筋肉と柔らかかな脂肪が絶妙なバランスで配合されていて、魅力的な弾力に満ちているのだった。

「きゃっ」

ぐいっと腕を引き寄せると、小柄な祥子はあっさりと青年の腕の中に収まってしまった。ふわりと、優しい若い女性の体臭とシャンプーの入り混じった香りが鼻腔をくすぐる。

「祥子さん、すぐくかわいいよ」

「ありがと……孝治くん……んんっ」

潤んだ目で見上げる恋人を抱きしめ、唇を重ねる。小顔のために意外なほどにプロポーションのよい身体は、手足は細身ながらも締まっっていて、胸やお尻はぷっくりと張り出してポリユームたっぷりだ。スポーツ好きだけあって締まった腰つきが扇情的ですらある。

「んんっ、ちゅぷっ……んふっ……」

柔らかくも甘美な唇はうっとりどろけ、青年を受け入れている。自分の唇で相手の唇を包むようにして吸い上げると、小さな女体がかすかに緊張した。

（祥子さん、キス好きだからな……もつと感じさせてあげないと）

舌で菌茎を舐めあげようとすると、逆に小さな舌が青年の口腔に進入してくる。かすかな発泡音とともに職場の後輩の舌を捉えたOLはせつなげに鼻を鳴らしてしがみついていた。

腕も脚も、こうして腕の中に収まってしまいそうに小さな身体を、ぎゅっと抱きしめてやると吐息がさらにせつなげに速まっていく。

「んんっ……はふうっ……んちゅっ……」

ラブホテルの薄いガウン越しに張り詰めた肌が震えていた。唇から全身に広がるゾクゾクするような快感を感じながら、さわさわと祥子の身体に触れていく。青年に抱きしめられたままの女の手が男の背中に回され、愛情たっぷりに撫でてくれる。

「孝治くん……大好き」

ようやく唇を解放された青年の首筋に顔を埋めながら、小さく囁いてくる。もう一方の手が首に回され、密着した肌が快感に粟立った。囁いたあともチュッチュッと音をたてて唇が顔を、首筋を愛撫し、うなじや耳に甘い吐息を吹きかけられる。ゾクリ



と背筋に快感の震えが走った。

（うわ、やっぱり祥子さん、上手だ……）

正直なところ、孝治はセックス経験が豊富なほうではない。濃密なキスも祥子に教えられたものだ。エッチではまったくかなわないのだが、彼とて男のプライドはある。やられっぱなしでいるわけにはいかない。

「あんっ」

薄手のガウンの胸もとに手をすべらせると、柔らかくも張り詰めた胸のふくらみが迎えてくれる。さわさわと指を波打たせるようにして豊かな乳房の頂点を求めてさまよう、女体はせつなげに震え、かすかに身をよじってみせる。

「孝治クンの手、エッチすぎるよお」

震える声で文句を言う祥子だったが、いやがっているそぶりはない。小柄なりに豊かな彼女の身体はどこも敏感で、ちよつとした愛撫でも声をあげてくれるのが嬉しい。

「今はエッチでもいいでしょ。ほら、祥子さんだって、こんなになってる」

「はうっ……そんないきなり……つまんじゃっ」

普段は小さな乳頭が、女体の興奮とともにすつかり頭をもたげ、快感を発するポタ

ンと化しているのだ。グミキャンディのような弾力に富んだ感触を指の間に楽しみなから掌や他の指で意外なほどに大きな乳房を触り、撫で回していく。

「あん……うんっ……」

しがついてくる腕の力が弱くなっているのをよいことに、後ろから抱きしめる姿勢になる。小柄な祥子の身体は後輩の膝の上に収まってしまった。

「う、後ろからなんて……すぐくエッチな感じ……」

父親が膝の上に幼い子供を抱いているような姿勢だったが、男の腕はガウンの襟元を割り開き、たっぷりとした乳房を露わにしまっている。

「きゃんっ」

首筋に息を吹きかけると素っ頓狂な声があがった。無防備な首筋から耳のあたりに唇と吐息で刺激を与えていくと少女のような肢体が耐えきれぬようにうねる。

「や、やだよう。孝治クンの顔が見えないと……」

孝治の腕にしがみつくようにして祥子が泣き声をあげた。柔らかい、しっとりした指が手首に触れてくるのがゾクゾクするほどに気持ちよかった。

「されるばっかりじゃなくて、あたしからもしてあげたいのに……」

「ぼくは祥子さんにしてあげたいから、おあいこだね」

耳元から唇にかけて後ろから唇を押し当てていくとビクビクと小さな身体が震えた。真新しいシャンプーの香りを感じながら、キメの細かい肌を舌を這わせていく。

「ああん。これじゃあ全然おあいこじゃないよお……」

快感にぐったりしている祥子だったが、さすがに年上の女性だった。手を後ろに回し、若者の太腿と、股間に屹立する男性器に触れてくるのだ。

「ううっ」

膝の上に彼女を乗せた形になっているので、ペニスの逃げ場はどこにもない。十分に発達した形のいいお尻と彼女の手に挟まれ、思わずうめいてしまった。

「うふふっ。孝治君、感じてる……」

「そりゃあ、感じるよ。祥子さんとエッチしているんだし」

後ろから、祥子の首筋に唇を押し当てていくと小さな身体がかすかに震える。快感に身体を震わせながら振り向くようにして唇をねだってくる彼女が可愛いと思う。

（女の子はキスが好きなの。キスが上手にならなくちゃダメよ）

以前、彼女はそう言っていた。当然ながら彼女自身が好きだったのだ。祥子は特に耳や首筋が弱いので、唇を重ねたままの愛撫で力が入らなくなるまで感じてしまうのだ。

「んっ……ああんっ……」

唇を重ねたまま、ガウンの中に手を入れ、本人が小柄なわりにボリューム感たっぷりの乳房をもみしだく。一度快感のスイッチの入った彼女は、全身が性感帯といっても過言ではない。

「すごいよ、祥子さん……乳首がもうピンピンだ」

「そ、そんな恥ずかしいこと……」

年上の女性が恥じらう様子が愛おしく、ついついじめてしまう。年上のはずなのに、童顔なこともあって祥子は可愛く思える。時には年下のようにすら感じてしまう。彼女のガウンを少しずつはだけながら、青年の両手は小さな恋人の身体を這い回る。スポーツ好きの祥子の身体は意外なほどに引き締まっていて、筋肉と脂肪のバランスがいいのか、もみ心地がよいのだった。

青年の手が下腹部に達した時には、恋人の身体からはすっかり力が抜けてしまっていた。それでも年上の意地なのか、ペニスを愛撫する手は巧みに若者の快感をかきたて、先端のぬめりを亀頭全体に塗り広げていた。

「あつ、ああん……孝治君……あたし、もう……」

「うん。ぼくも祥子さんの中に入りたい」



「そ、そんな……私よくわからなくて……孝治君が気持ちよくなるなら……」  
たぶん、さやかは本気でわからないのだろう。佳奈美の見よう見まねで青年に愛撫をするのだが、そのたどたどしさが逆に青年の官能を引き出してしまふのだ。

「こ、こうかしら……孝治君、気持ちいい？」

「え、ええ、気持ちいいです……二人のおっぱい、すごくいい……っ」

二人の動きは当然のように違い、四つの乳房の押しつけ具合も均等ではない。四つの方向から柔らかい乳房に包囲され、滑らかな肌にすりたてられる快感があつという間に若者の官能をその極致に向けて追い立てていく。

「すごい。今度あたしもやってあげるね、孝治君」

祥子は孝治に髪や首筋を撫でてもらいながら、恋人の上半身全体に唇を這わせている。首筋や耳に年上の恋人の舌が触れるたびに、ザラザラした舌が若者の滑らかな肌を刺激するたびに青年の身体に快感の粉が撒き散らされていく。

「男の子なのに、孝治君の乳首も硬くなってる。すごく気持ちよさそう……」

そう言いながら、OLの指が滑らかな青年の胸に浮き上がる小さな突起を弄ぶ。痕跡的といつてもいい、雄性には意味のない、授乳のための器官がじわじわと、なんともいえないもどかしい快感を身体の奥にしみ込ませていく。

「うっ、ううっ……」

思わずうめきが漏れてしまうほどに気持ちよかった。祥子の肩や胸の滑らかな肌が、弾力に満ちた若さにはちきれんばかりの乳房が、小さく細い身体が青年の手にわななき、甘い喘ぎを漏らすのが快感だった。

下半身全体が甘美な柔らかい、文字通りの美肉に完全包囲されている。正面から佳奈美が、側面からさやかかその豊かな女の象徴たる乳房で男のシンボルを追い詰めている。いつしか上司のぎこちない動きも滑らかなものになり、太腿にあたる二人の身体の柔らかさも、その声も全てが脳髓を熱するほどに気持ちがいいのだ。

「うふふっ。高原君、もう限界かしら」

「は、はい……このままじゃ、出ちやいます……」

それが正直な感想だった。前回のクルマの中での出来事にも増して女たちは積極的で、意外なほどに息が合っている。性経験の少ないはずのさやかですら、いつの間にか巧みな動きで乳房を揺らし、若者のペニスを撫でしごくのだ。

「うふふっ。これから一気に三発だもの。今はこれくらいに上げてあげろ」

「さ、三発って、そんな無茶なっ」

青年の抗議など何の価値もなかった。女たちは勝手に相談をすませてしまおう。射精

寸前にまで高まったペニスが美女三人の間でビクビクと震えている。

「それじゃあ、皆川さんは高原君のお顔。たっぷり舐めてもらってね」

「な、舐めてって……その……」

お堅い課長代理には通じなかった。佳奈美がにっこりと笑いながら眼鏡美女の耳元に唇を寄せる。それだけの動作すらもが色っぽいのだ。

「くすっ。ア・ソ・コよ。大事なところを、高原君に舐めてもらうのよ」

「そ、そんな……恥ずかしすぎますっ」

ぶんぶんと顔を振るさやかだったが、その間にも祥子と佳奈美はそれぞれに青年の腰をまたいでしまう。

「うふふっ。もう孝治君のオチンチンは私たちのものよ」

「さやかさん、まだ舐めてもらったことないでしょう。すごく気持ちいいですよ」

「そっ、そんなぁ……っ」

困った顔をするさやかだったが、もうあとには引けない。恐る恐る青年の顔をまたいで腰を落とそうとする時には泣き出しそうな顔をしていた。

「こ、孝治君……笑わないでね」

「笑いませんよ。さやかさんはいつでも綺麗です」



そう。彼女はいつでも美しい。下から見上げていてもその整ったしなやかなボディラインはいささかの緩みもなく、どこをとっても大きすぎず小さすぎず青年にとつてちょうどいい大きさとボリュームを保っている。

「ああっ、恥ずかしい……っ」

真つ赤な顔をしていた上司は恥ずかしさのあまりに両手で顔を覆ってしまった。部下としては優しく手伝つてあげるべきだろう。彼女の太腿を優しく撫でながら、秘処を口元まで誘導していく。

真つ白な太腿にはかすかに血管が浮き出ているのが生々しい。ふっくらと滑らかな肌は羞恥のあまりにかすかに汗ばんでいた。その太腿の付け根が目の前に来た瞬間、青年は無意識のうちには賛嘆のうめきをあげていた。

綺麗だった。使い込まれていない花弁は色素の沈着も控えめで、色だけならば少女のようだが、発達した花弁はやはり大人の女性のものだ。淫らな肉溝を飾る花弁はすでにうつつすらと湿り、いやらしい香りを発散していた。

「いやあっ……そんな……孝治君の息があたるっ」

両手で彼女のお尻を抱え込むようにして、彼女の花園に口を近づけていく。まずは花弁に吸いつき、大淫唇から引つ張り出すようにするとそれだけで上司は激しく身悶

えしてしまふほどの敏感さを披露してしまふのだった。

「はううっ……いっ、いきなりっ、いきなりはだめえっ」

だめと言いつつも反射的に閉じようとする両腿が若者の顔を挟み込んでしまっており、ますますその口を秘処に押しつけてしまっている。

「あっああっ、だめっ。孝治君のお口だめっ。あっああ——っ」

びくん、びくんと均整のとれた肢体が若者の上で跳ね上がる。顔をpushさえたままむき出しになった乳房がそのたびに大きく揺れていた。ナチュラルロングの髪が乱れ、白い肩にかかるのがいやらしい。

「ああんっ、あひっ……す、吸っっちゃうのっ……それだめっ」

チュルチュルといやらしい音をたててかぐわしい淫蜜を舐めすすり、花卉を吸い込むようにしてすみずみまで舌を這わせていく。もとから感じやすいくせに経験の少ない上司は早くも悩乱してしまっていた。

「あおおっ……すっ、すぐすぎるのっ……ゆっ、許して、孝治君……っ」

もう眼鏡の下の切れ長の目は涙をためたまま閉じられ、薄めの唇はただ喘ぎとうめきを漏らすのみだ。有能な、お堅い課長代理の姿はもうない。

「す、すごーい。さやさかん、感じやすいんだあ……」

「私たちも負けてはいられないわね。いくわよ」

お腹側に祥子、脚側に佳奈美が並んで青年にまたがっている。それだけで二人の内腿の感触が気持ちいいのだが、もちろんその先が激しいのだ。

「ごめんね、祥子ちゃん。お先にいただくわ」

「ああっ……ずるいつ、あっそんなっ」

二人の女が同時に上になる騎乗位。小柄な祥子を後ろから抱きかかえるようにして佳奈美が肉槍の上に狙いを定め、そろそろと腰を下ろしていく。

みちっ。ぬちゅぬちゅ——っ。

かすかな水音がいやらしかった。すでにじつとりと蜜のにじむ佳奈美の秘花はさしたる抵抗もなしに青年のものを飲み込んでいく。

「んんっ——。すごいわ。前よりも大きい——っ」

ペニスにからみつく膣肉のうごめきが心地よい。複雑な女性器の内部構造がペニスを圧迫し、こすり、そして締めつける。得意先の重役美女の女性器は祥子やさやかそののような特徴はなかったが、大柄な女性の奥行きと包容力、そして鍛えられた肉体の締めつけを兼ね備えており、均質で上質な締めつけを見せていた。

「ううっ……い、いきなりですかっ……」

さすがに青年がうめく。先ほど絶頂寸前で乳房包圍網から逃れたばかりのペニスはまだまだ敏感なままで、もどかしい、いてもたってもいられないような射精感覚がすぐに舞い戻ってきてしまう。

「ごめんね、祥子ちゃん。お詫びにこうしてあげる」

背後から祥子を抱きしめる形になった佳奈美が小柄なOLの乳房に手を這わせ、首筋に唇を押し当てていた。そのまま鼻面と唇で祥子の髪をかきわけ、耳をさぐりあてると唇と舌と、そして吐息で敏感な耳たぶを可愛がるのだ。

「あひゃあつ……ゾ、ゾクゾクしますっ」

もともと祥子も性感豊かな身体の持ち主だ。このような淫気に満ちた部屋では興奮を抑えきれない。まるで大人と子供のような身長差のあるOLを優しく抱きしめながら、得意先の女取締役は身体をくねらせる。

そうすると肉槍を飲み込まれたままの若者と敏感な背中の肌に爆乳のすべる感覚に震える少女じみた女の二人が同時にうめくのだ。

「あううっ」「ひいんっ……お、女同士なのにな」

「同性だって異性だって、気持ちいいものは気持ちいいのよ」

自らも快感に目を細め、豊満な肢体を弾ませながらショートボブの女が唇を舐める。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**VALKYRIE**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!